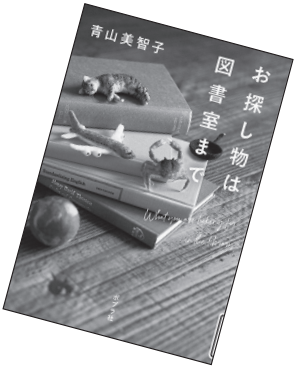
「お探し物は図書室まで」

著者：青山　美智子
出版：ポプラ社
発行：2020年11月９日



商業の授業で「働く理由」について生徒とよく話す。教科書的な答えとしては「生活維持・自己実現・社会貢献」の３つなのだろうが、実はこのバランスを取ることは難しい。加えて昨今は「ワーク・ライフ・バランス」、つまり働かない時間とのバランスをどう取るかも大切になった。いずれにしても、日々の生活の中で仕事が大きな意味を持っているのは確かで、だからこそ我々は仕事に悩み、行き詰まり、考える。

本書はいわゆるビジネス書ではなく、小説である。ここで小説を紹介してよいのか迷ったが、読後にじんわりと「働くって、いいな」と思えるこの感覚をぜひ皆さんと共有したいと思い、選ぶことにした。

五つの章からなる短編集で、それぞれ設定も主人公も異なるが、共通する場所および人物として、地域のコミュニティハウス内の図書室と、そこで働く司書の「小町さゆり」が出てくる。

各章の主人公は以下の通りである。

一章：朋香（スーパーの婦人服売り場で働く21歳）
二章：諒（家具メーカーの経理部で働く35歳）
三章：夏美（元雑誌編集者、育児をしながら働く40歳）
四章：浩弥（無職、30歳）
五章：正雄（定年退職したばかりの65歳）

５人はみな仕事にまつわる違和感や不満・不安を何かしら抱えながら生きている。朋香は田舎から東京に出てきたものの今の仕事にやりがいを見いだせず、諒はいつか起業したいという夢を持ちながら踏み出せないでいる。夏美は雑誌編集の仕事に懸命に取り組んでいたが、産休・育休を経て復職すると他部署に異動となり悶々としている。浩弥はデザインを学んだが就職に失

敗してニートとなり、正雄は定年退職したとたんに社会とのつながりが全て絶たれたように思え呆然としている。

そんな５人がそれぞれの思いを抱えながら、同じ図書室にたどり着き、司書の小町さゆりと出会う。そして彼女に紹介された本から、人生を少しだけ、でも確実に前に進めるヒントを見つけていくのである。

本書の一番の魅力は「視点の多様さ」だと思う。例えば、小町さゆりと初めて出会う場面で、５人はそれぞれ別の描写をする。朋香は「冬ごもりしている白熊」、諒は「ゴーストバスターズに出てくるマシュマロマン」、正雄は「正月に神社で飾られる巨大な鏡餅」･･･思わず笑ってしまうが、主人公たちはそれぞれの表現で、同じ人物を説明する。

ほかにも、夏美は本を読みながらふと気づく。『資料部に異動「させられた」。家事も育児も「やらされている」。自分が中心だって思うから、そういう被害者意識でしか考えられないのかもしれない。』

浩弥に対して小町さゆりはこう言う。『伝記や歴史書なんかを読むときに気をつけなくちゃいけないのは、それもひとつの説である、ということ。実際のところは本人にしか分からないよ。』

正雄がある詩の解釈について娘の千恵と話すと『驚いた。同じ文章なのに、わたしとはまるで違う風景を千恵は見ているのだ。』

主人公たちは、本との出会いを通じて、自分がいた世界から少し視点をずらしたり、上げたり、広げたりする。すると、ある人は周囲の優しさに気づき、ある人は仕事のやりがいに気づく。本当の目標を再確認した人もいる。それらは劇的な変化ではないけれど、彼らの背中を優しく押し、それがさらに周囲の人々をも動かしはじめる。

図書室にやってきた主人公たちに、小町さゆりが必ず問いかける言葉がある。

「何をお探し？」

それを聞いたとき、彼らはみな一瞬たじろぐ。「私が探しているのは･･･」

本当は本を探しにきたんじゃない。居場所？仕事の目的？人生の意味？読み手も、彼らと一緒に考え、答えようとする。それが５回繰り返されるうちに、読み手も自分の「探し物」が見えてくる。

なお、章をまたいで登場するのは小町さゆりだけでない。各章の主人公たちも別の章で「脇役」として出てくる。ある章で仕事に行き詰っていた主人公が、本や人との出会いで変わり、その後の章では生き生きと仕事をしている様子が描かれるなど、各章が独立しつつも、全体が一つの時間軸の上で絡み合いながら進んでいるのが面白い。他の登場人物も魅力的である。できれば、小町さゆりが毎回渡す「付録」や、さゆり自身のことをもう少し掘り下げてほしいと思うが、それは読み手の想像にあえて任せているのかもしれない。

それぞれの章で私にとって最も印象的だった場面や表現を引用する。

一章：朋香が先輩社員の見事な接客を見て

エデンの婦人服販売員が「たいした仕事じゃない」なんて、とんでもない間違いだった。単に私が「たいした仕事をしていない」だけなのだ。

二章：諒が恋人の比奈に、起業すべきか迷いを打ち明ける場面

「諒ちゃん、世界は何で回っていると思う？」

「えっ…。えっと、愛、とか」

僕が答えると比奈は「えーっ！」と叫んで目を丸くする。

「すごいなぁ、諒ちゃんのそういうところ好きだけど」おかしそうに笑ったあと、比奈は諭すように言った。

「私はね、信用だと思ってる」

「…信用」

「そうよ。銀行からお金を借りるのも、仕事を依頼するのも受けるのも、友達との約束も、レストランでご飯を食べるのも、双方の信用で成り立ってるのよ」

三章：夏美が仕事で知り合った作家に「あなたもメリーゴーランドに乗ってる」と言われる場面

「独身の人が結婚してる人をいいなあって思って、結婚してる人が子どものいる人をいいなあって思って。そして子どものいる人が独身の人をいいなあって思うの。ぐるぐる回るメリーゴーランド。おもしろいわよね、それぞれが目の前にいる人のおしりだけ追いかけて、先頭もビリもないの。つまり、幸せに優劣も完成形もないってことよ」

四章：浩弥が高校の同級生、征太郎（水道局勤務）と再会して

「水道局なら、安泰だよな」

「絶対安泰な仕事って、何がある？」

「そりゃ、征太郎みたいに公務員とか、大企業とか」征太郎はそっと首を横に振った。

「ないよ。絶対安泰で大丈夫なんて仕事、ひとつもない。みんな、危う